

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12514

研究課題名（和文）民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望

研究課題名（英文）In West Africa where generations are changing after democratization, what kind of 'change' do media and youth hope for?

研究代表者

田中 正隆（TANAKA, MASATAKA）

大谷大学・社会学部・教授

研究者番号：30398549

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：1990年代に民主化をすすめたアフリカ諸国では、いま、旧体制からの体制転換や政治アクターの世代交代が起こっている。本研究では、民主化前後に生まれた二十～三十代の人々を「若者」とし、政権の世代交代にともなう、社会変革を求めて胎動する諸活動とその今後の展望を明らかにした。アフリカのデモクラシーの現状は民主化転換からポピュリズムが生ずるなか、あらたな権威主義が台頭して、各国における閉塞感として広まっていることが確認された。そのうえで、抑圧を増す政治情勢の変化に抗して、人々はマスメディアからソーシャルメディアへと社会批判の場を移行し、独自の展開を見せていることを明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若者論は近年、アフリカの人口論で注目されているが、国内、国外（国際）への情報発信がなお少なかった。そこで、本研究が国際的な情報発信や議論の実践を両輪とした意義は大きい。研究期間の一連の英文業績は、本文やアブストラクトを researchgate や academia.edu などの学術サイトへリンクすることで国際的な公開、アクセスの環境を整備した。メディア、若者、アフリカ地域研究に関心を抱く、十数か国の研究者からの参照、引用がなされている。

これは、今後の情報交流や研究の深化発展への途を拓き、「西アフリカ社会の世代交代と社会変動における若者層の諸実践」についての総合研究への端緒となる。

研究成果の概要（英文）：African countries that became increasingly democratic in the 1990s are now undergoing regime change from the old regimes and a generational shift in political actors. In this study, we defined “youth” as people in their 20s to 30s born before and after the democratization, and investigated specific examples of social movements. The study clarified various activities and their future prospects in the quest for social change. In each countries of Africa, as multi-party systems and popular elections took hold from the democratic transition, populism trend prevailed. The new president's administration soon became authoritarian, and there observed a sense of stagnation among those who had lost their freedom of speech. Based on these situations, the study clearly showed that people are shifting from mass media to social media for social criticism against the changing political climate of increasing repression, and that this unique assembly is being developed.

研究分野：文化人類学

キーワード：アフリカ ベナン トーゴ セネガル 民主化 世代交代 若者 メディア

1. 研究開始当初の背景

2000 年代以降、アフリカ諸国では旧世代の元首の引退や三選禁止の選挙制度によって、政界の世代交代がすすんでいる。それはベナン、トーゴ、セネガル、ブルキナファソといった仏語圏西アフリカでも顕著である。だが、変動期にあっても、アフリカでは年長者や一部の政治サークルによる政策決定権の独占がつづき、一般民衆は政治論議に参加できなかった。とりわけ若年層は、経済活動の担い手であるにも関わらず、そうした論議から遠ざけられていた。

経済では、資源開発への投資や援助対象ではなく、中間層のマーケットをめぐる、近年、中国やインドなどのアフリカ進出がめざましい。政治では、長期政権の崩壊と次代への交代がおき、社会環境では新たな情報機器が流通し、教育や就業機会が広がるなか、若年層の動向が社会変化のきっかけになることも見られるようになってきた。アフリカは二十代の年齢層が多数派となる「若い大陸」と呼ばれてきたが、彼らはエスニック、年長者、利権における既存の優位集団の制約から、表舞台の順番がくるのを延々と待ち続ける待機状態 *waitthood* におかれてきた。

しかし、アフリカの若者は、しだいに声をあげ始めている。若者層の街頭デモ行進や集会での意見表明がなされ、メディアの参加型番組やファン・コミュニティ(友の会)が若者の不満を包摂する場となっている。そして、従来の暴力性とは異なり、社会運動の新たな表現形態であるサウンドやパフォーマンス、ペインティングなどがアフリカでも認められる。

ベナンでは 2002 年の政権交代を前にして、大統領の三選禁止の法制度を護るために、「憲法をいじるな」と書いたプラガ市街のいたるところに貼られるキャンペーンが行われた。トーゴでは 2005 年の旧国家元首の急死と世襲大統領の即位をめぐる、首都を中心に軍と市民との衝突が起きたが、国際的な圧力もあり、政府は国政選挙の実施を余儀なくされた。セネガルでは 2011 年ワッデ前大統領の退陣を促した若者の社会運動「もうたくさんだ *y en a marre*」がおこり、アートやラップ音楽で意思表示する手法が注目を浴びた。その後、実際に政権交代が起きている。これらの比較研究は、途上国の民主化を理解するには不可欠だが、先行研究はアフリカ人研究者の事例分類にとどまっている。世界的にも共通性をもつ、新たな社会変動と世代交代について、なおも事例研究が不足している。

2. 研究の目的

1990 年代に民主化をすすめたアフリカ諸国では、いま、旧体制からの体制転換や政治アクターの世代交代が起きている。グローバル化によって人やモノの流動が増え、マスメディアや携帯端末の普及など経済や社会環境が変化しつつも、アフリカではとりわけ若年層が政策論議に入れにくい待機状態におかれてきた。だが、近年、メディアで意見表明したり、ストリートで示威活動するなど、彼らの新たな表現を模索する動きがでている。本研究はそうした場を彼らの不満や不安を包摂する機会ととらえ、胎動する若者層の活動と、彼らが抱く政治、経済、社会的「変化」の展望を、現地調査で明らかにする。対照的な民主化にあるベナン、トーゴと先進国セネガルの事例の比較、総合研究から、21 世紀アフリカの世代論と新たな社会像の提示をめざす。

3. 研究の方法

本研究はアフリカの民主化前後に生まれた二十～三十代の人々を「若者」として焦点化し、政権の世代交代にともなう、社会変革を求めて胎動するその活動と今後の展望を明らかにする。寛容派ムスリムによる産業化がすすんだセネガルと、民主化において対照的なベナン、トーゴの事例から総合研究を展開する。

具体的方法として、現地での聞き取りと関係機関への参与観察という人類学的研究法を主とするが、その際、既成の政治サークルから外れ、メディアを通じて意思表示をしようとする人々に焦点をあてる。参加型番組に積極的に参加したり、友の会の人脈を広げる人々、自作の曲を売り込む音楽家、海外との取引を模索する個人起業家、放送を通じて郷土に情報提供する海外のディアスポラなど、社会への発信をする人々を対象とする。

一年度：ベナン、トーゴの政権交代(2016、2015 年)へのメディア視聴者各世代の意識調査とその背景となる生活史の聞き取りをする。視聴者参加型番組では、多くの番組コンテンツを収集する一方、人々がどのようにメディア視聴をし、参加しているかを調べ、その人脈から広がる友の会や市民団体の活動について明らかにする。トピックとして、ベナン(2016 年)、トーゴ(2015 年)の国政選挙についての報道の実態と、世代間での受け止め方の違いを把握する。以上を具体的に行ない、現政府による文化、教育や若者支援政策について、現地刊行物と政府関係者への聞き取りと対照して明らかにした。

二年度：トーゴ、ベナンのローカルメディアの参加型番組と地域コミュニティとの連関を参与観察と聞き取りで明らかにする。トーゴ、ベナンでのローカル局と携帯端末との連携を把握する。メ

ディアの友の会や市民団体への聞き取りと参与観察をする。ローカル局は運営のため、地域コミュニティや海外 NGO と協力している。以上の具体をふまえ、地域住民ネットワークの現状を調査した。

第三-四年度：セネガルでの若者と社会運動に関する調査と、三国の比較により、メディア参加のメカニズムを解明する。第三次、第四次現地調査として、セネガル、ダカール市内でのメディアと若者層調査をする。産業化の度合いとメディア参加、利用の相関について問う。イスラームの存在が重要なため、若者層の教育機関であるイスラーム学校とコミュニティを調査する。以上を具体的内容として、産業化、政治体制、宗教的要素から若者の社会・政治への意識と活動を明らかにした。

当初の予定では、二年度の両国での調査において、地域社会のローカルメディアに焦点をあてて、その利用(聴取状況)や参加の違いを明らかにする計画だった。ところが2019年末以来の新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、3月でのWHOによる世界的なパンデミックの事実認定を経て、各国は海外からの渡航を制限した。予定していた複数の経由地や調査地を往復することは断念せざるを得なかった。

二年度以降の計画を後ろ倒しし、可能な範囲で現地調査を行った。中断期前のラボールの再構築とともにコロナ期間とコロナ後の社会情勢の取材と理解を先決とし、その上で計画を実施した。すなわち、一年次の都心部での成果をふまえて、ベナン、トーゴでのローカルメディアの利用や参加の違いを明らかにすることを重点とする。ローカル局は運営のため、地域コミュニティや海外 NGO と協力している。これを基点とした地域住民ネットワークの現状を調査し、あわせて市民の携帯電話利用とローカル局との連携を把握する。以上を変更案として実施した。

4. 研究成果

研究成果としては、各年度の実績報告ですでに記載してきた。それらは単に発表年月日や場所などの書誌情報にとどまっていたため、以下では代表的な成果について、内容と意義を記す。

(1)『アフリカの聞き方、アフリカの語り方 メディアと公共性の民族誌』風響社、2021年
本書では、アフリカ社会にもっとも浸透しているマスメディアとして、ラジオに焦点をあてた。ジャーナリストたちの仕事や、番組と関わる視聴者の活動を紹介しつつ、メディアが社会の中にどう埋め込まれ、また社会を作り出しているかを明らかにした。情報環境の大きな変動期にある今日のアフリカ社会では、人々はパーソナルな携帯端末を用いて民放の討論番組などパブリックな場に参加する。視聴者参加番組や伝統文化を継承するなどの事例から、それが権威への対抗となり、かつ暴露欲求や商業主義という二面性をもちながら、アフリカの人々の次世代への希望を生み出していることを論じた。

(2)『大谷学報』99(1)、2019年、“Mediation between the Secular and the Religious : A local radio program in Benin and the Post-Secular argument”

本稿はアフリカ伝統宗教と文化政策とのからみあいのなかで、宗教間の対話や融和をすすめる民間の活動を紹介した。アフリカを対象とする文化人類学では1990年代から呪術、妖術研究のリバイバルがおきた。その後、宗教社会学、政治学におけるポスト世俗主義論はそれと関連しつつ、平行して展開してきている。妖術と近代論は1990年代以降のグローバル化、新自由主義によって、経済面での不確定性や競争の激化から資本主義のもつ病理批判を行った。社会学、政治学におけるポスト世俗主義論は、急進的組織の拡散やテロリズムを背景に法的政治的制度としてのリベラルデモクラシーの危機が焦点となっている。

近年の世界的な政治と宗教とのせめぎあいの状況のなか、世俗と宗教との分離の是非や世俗主義の再検討が議論されている。本稿は、ポスト世俗主義の時代のなかでアフリカ社会の宗教政策はどのように展開しているのかをベナンの事例から検討した。西アフリカのベナンは伝統宗教についてその祝日を憲法上で保証したライシテの国家である。人口全体としては30パーセントのキリスト教系の人々に、25パーセントのムスリム、伝統宗教は18パーセントほどをしめる。西アフリカのベナンを対象に、90年代以降の伝統宗教の民主化の事例と、南西部のローカルラジオにおける宗教間理解の放送番組の事例を紹介し、この分析をとおしてベナンにおける宗教文化の意義と複数宗教の共生の試みについて検討した。

(3)International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2021,Yucatan, Mexico

2021,November 13 “Thirty Years after the Democratic Transition in Benin, West Africa: The Case of Public Opinions in Radio Call-In Shows”

分科会は“An Anthropology of Contemporary Technoculture”であり、分科会全体では世界各地における技術のイノベーションが人々の生活にどのような影響をもたらすのか、環境と人間との関係にどのように作用するのかを各論者が報告していた。

こうしたなか、本発表では、2010 年代、世界各地で新自由主義やポピュリズムに対抗するデモや抗議行動が活発化したことを背景として、アフリカ、ベナンでは都市から村落部まで広く浸透したラジオの放送番組に、人々の assembly が見出せることを指摘した。メディアと報道をめぐる人々の語りを分析すると、アフリカのデモクラシーの現状と今後の課題をよみとりつつも、民主化転換からポピュリズム、あらたな権威主義が支配的となってきた政治シーンへの不安へが、この国の閉塞感として広まっていることを指摘した。インターネットや携帯端末などの新たな情報環境のなか、このような政治情勢の変化に対して、人々の語りの場がどのような対応を迫られたかを報告した。こうした事例研究に対して、分科会参加者から、開催地であるメキシコでの現状との比較についてコメントを頂き、活発な情報交換がなされた。

(4)European Conference on African Studies 2023, Cologne, Germany
2023, June 03 “Where have 'the Grogneures' gone ? : Online Politics from Below in the 21st century of Benin”

コロナを経て、ECAS 9、2023 がドイツのケルンにて 3 年ぶりに対面式で開かれた。会議では Session 07 として開かれた分科会があり、“Media forerunners: reflecting on emerging socio-political youth leadership in times of conflict and digitalization” として、アフリカにおける技術、とくにメディアのイノベーションが人々の社会参加のありようや生活にどのような影響をもたらすのか、とくに政治や社会変革の可能性に焦点をあてて、各論者が具体的事例にもとづいた報告をしていた。

こうしたなか、本発表では、2010 年代、新自由主義やポピュリズムに対抗するデモや抗議行動が活発化した世界情勢を背景として紹介し、アフリカ、ベナンでは都市から村落部まで広く浸透したラジオの放送番組に、人々の assembly が見出せることを指摘した。ベナンでは他のアフリカ諸国と同様に民主化転換からポピュリズム、あらたな権威主義が支配的となって人々には閉塞感が広まっている。だが、抑圧を増す政治情勢の変化に抗して、人々の社会批判の場がマスメディアからソーシャルメディアへと移行し、独自の展開を見せている。人々の参加型番組が携帯端末と連動して、音声や文字情報の流通が活性化している。分科会におけるアフリカ出身の報告者や参加者からは、カメルーンやマリの事例やその個別性をふまえた質疑応答が行われ、活発な情報交換がなされた。

本研究は調査、分析、論文化だけでなく、国際的な情報発信や議論の実践を表裏に位置づけていた。とくに後三点のほか一連の英文業績は、本文やアブストラクトを researchgate や academia.edu などの学術サイトへの掲載やリンケージすることで国際的な公開、アクセスの環境を整備している。アフリカ地域研究やメディア、若者論に関心を抱く、十数か国の研究者からの参照、引用がなされている。コロナ禍による中断をはさんでの対面的な情報交換の重要性も確認された。これは本研究の成果であるとともに、今後の情報交流や研究の深化発展への途を拓くものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 TANAKA Masataka	4. 巻 99(1)
2. 論文標題 Mediation between the Secular and the Religious : A Local Radio Program in Benin and the Post-Secular Argument	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大谷学報	6. 最初と最後の頁 17～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田中正隆
2. 発表標題 ベナンにおける「不満の場」のゆくえ
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TANAKA Masataka
2. 発表標題 Where have 'the Grogneurs' gone ? : Online Politics from Below in the 21st century of Benin
3. 学会等名 European Conference on African Studies 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TANAKA Masataka
2. 発表標題 Thirty Years after the Democratic Transition in Benin, West Africa: The Case of Public Opinion in Radio Call-in Shows
3. 学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1．発表者名 TANAKA Masataka
2．発表標題 In Hope of Change: Active Audiences and their Solidarity in the Post-Charisma Era in Benin and Togo
3．学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2019 (国際学会)
4．発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1．著者名 田中正隆	4．発行年 2021年
2．出版社 風響社	5．総ページ数 284
3．書名 アフリカの聞き方、アフリカの語り方 メディアと公共性の民族誌	

1．著者名 川田牧人、白川千尋、飯田卓、田中正隆、ほか12名	4．発行年 2020年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 480
3．書名 現代世界の呪術 文化人類学的探究	

1．著者名 和崎春日、鈴木裕之、中野紀和、梅屋潔、東賢太朗、塩谷暁代、平野（野元）美佐、田中正隆、他42名	4．発行年 2020年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 830
3．書名 響きあうフィールド，躍動する世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------